

小学校における染色工芸学習

— デザインに葉を用いた型染めから —

鳥谷さやか¹, 田中 嘉生²

Learning of Craft dyeing at the Elementary School : through resist paste printing of leaves design

Sayaka TORIYA, Yoshio TANAKA

要 旨

平成21年8月20日、佐賀大学において教員免許更新講習が行われた。染色の教材化を意識した内容として行われた教員免許更新講習では、それぞれの教育現場で展開可能となるように、描くことに苦手意識のある者にとっても取り組みやすいデザイン方法論を用いることとした。それは、実際に採取した葉を型紙の役割とさせるデザインアイデアを取り入れた、糊防染による「藍染め」という課題設定となった。本稿は、その教員免許更新講習において開講された染織工芸演習で試みた「藍染め」を通してみることでできた染色工芸実習について報告検証するものである。また、同じ方法論を用いて行った小学生対象の藍染めの体験実習に、教員と小学生の作品を比較すること等考察を加え、小学校における染色工芸学習の一授業方法論を提示した。

1. はじめに

「藍染め」は、よく耳にする私たちには馴染みのある染色用語である。現在、小学校における染色学習では、絞り染めによる教材化が一般に多く行われている。それは、絞り染めが輪ゴムや糸でくくるなど比較的短時間で防染の準備ができ、安全で容易に染色作品を完成させることができるのが大きな要因と思われる。しかし、より造形的要素を加え、絞り染め以外の技法で小学校でも行える染色工芸として、今回の「藍染め」の課題設定をした。通常防染糊を使用した型染めと呼ばれるものは、下絵をデザインし、それを型紙に写して彫り、糊置き、乾燥後に染色というように、多くの手順を必要とする。したがって、一日の内に作品を完成させることが非常に難しい染色方法である。防染糊を使った型染めが造形教育の現場で行われにくいのは、この点が一つの壁となっていると考える。そこで、染料の準備等を行っておけば、短い時間で染着を果し濃い色も得ることのできる、インド藍を使った染色を行うことを試みるに至った。

¹ 福岡県立美術館 非常勤職員

² 佐賀大学 文化教育学部 美術・工芸講座 教授

また、生の葉を型紙の代わりとするユニークな型染めのアイデアも提案され、その実践も試みた。自然の中の形を自ら選び構成することは、学校現場の先生にとっていろいろな授業内容の展開が期待できるとも考えた。以下、教員免許更新講習で行ったことを基に考察を進めていく。

2. 実習行程

教員免許更新講習での制作時間は5時間で、間に1時間の休憩を挟む。参加者は40名であった。前準備として、布を糊板に貼り、2 cm ほどの幅で四辺をマスキングするところまで行った。

○事前に準備しておくもの

インド藍による藍液、被染布の木綿、防染糊等染色にかかわる材料、道具他。

インド藍を用いるのは濃色を得やすいためである。また、被染布に木綿を使うのは、古来より麻や木綿が藍によく染まり、理に適った繊維と染料の関係にあるからである。

1) 下絵をデザインして型紙にその下絵を写し取り、彫りを行い、型紙を完成させる工程

今回の染色学習の中での大きな特徴の一つが、以下の型紙の作り方である。学齢が進むにしたがって描くことに苦手意識を持つ児童も見られるが、これはそんな児童にも造形の面白さを十分に感じ取ってもらえることが期待できる方法論と考えた。また、教員にとっても有効な指導方法論と思い実践を試みた。

1 葉を採取する

これから使用する葉を自ら採取しに行く。葉をそのまま型として用いるので、厚みのある硬い葉や茎が太いものは適さないなど、凹凸ができる限りないほうが良いことを理解する。普段何気なく見ている葉でも、葉の厚みを意識したり自然が作る美しい形に注目したりすると多くの発見があり、改めて自然が作り出す有機的なフォルムに注目することとなる。また、画面を構成する際には葉のシルエットが構成の重要な要素の一つとなるため、細長い線的なものや幅広い面的なものなどといったことも意識する。それによって、線、面をどう取り扱うかという造形思考が生まれる。また、この工程は生物分野との関わりも意識される。

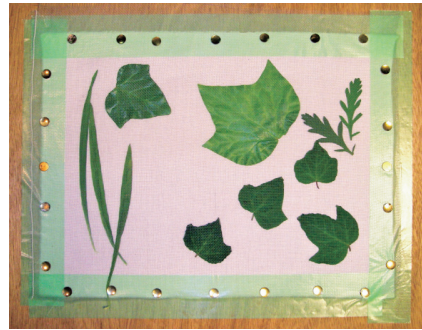
2 葉を布の上に構成する

採取してきた葉を構成していく。糊置きの際、葉を置いた所には防染糊が付かないため、その部分が青く染まるという原理を理解する。葉の形だけでなく、染色される青と防染されて残る布の白がそれぞれどれくらいの割合になるかをイメージし、その面積や空間のあき具合なども意識しながら構成をする。形と空間の関係を強く意識することになり、構成力を養うトレーニングに繋がる有効な工程と考える。

2) 糊置きと呼ばれる工程

1 ネットを乗せる

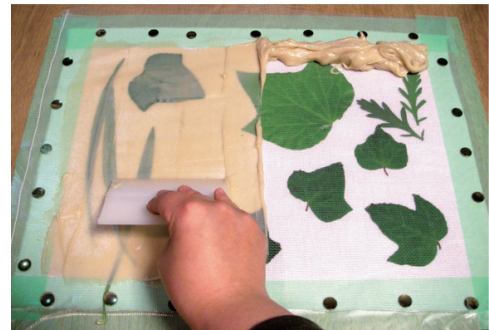
網が波打っていると糊置きがしにくいいため、なるべくぴんと張り画鋏で四隅とその間を数カ所止める。画鋏は糊置きの際に邪魔にならないよう、養生テープでマスキングをしてある範囲内かその外側に刺すようにする。網は葉を押さえる役割をすると同時に、糊の厚さを調整する役割も担う。



2 糊置き

- ① スプーンで糊を取り、画面の上に置く。スキージを使い、まずは全面に糊がいきわたるようにのばす。奥から手前に向かって、力を入れずにゆっくりと手を動かす。糊は軟らかすぎても葉の形が鮮明に現れず、硬すぎてもものびが悪く網目もはつきりと残ってしまうため、適度な硬さが求められる。また、季節によっても多少粘度を変える必要がある。

この糊を使った染色技法は、小袖衣装の文様染めと相まって江戸期に隆盛を迎え、材料の変遷とともに工夫が加えられ重要な染色技法として今日に至っているなど、ここでは染色技法の歴史的背景にも触れることで、より深い染色工芸学習への理解へと繋がっていく。



- ② 今置いた糊をこそぎ取るような感覚で、少し力を入れてスキージを動かす。スキージで取った糊はボウルに戻す。



- ③ 再び糊を置く。今度は少し糊に厚みを持たせるようにし、葉がうっすらと透けて見えるくらいを目安とする。力を入れずに、表面が①よりも平らになることを心がける。糊の厚みが薄いと、藍液に浸した時に防染が不十分となり、形と地との対比が美しく現れないため、糊の適度な厚さに注意する。



- ④ 網をはがす

画鋏を全て外し、片方を手で押さえながら一方向からゆっくりと網を上げていく。葉は網に付いてくる。糊の薄い部分がある場合は糊を足し、指でのばして少し厚みをつけて補修する。



- ⑤ 糊を乾燥させる

ドライヤー等を使って糊を乾燥させておく。触っても表面がべたついていない程度に乾けばよい。今回は藍の浸染のため、完全に乾燥させる必要はない。

3) 染色工程

インド藍はマメ科の小灌木で、インジゴという色素を含んでいる熱帯植物から得られる天然染料である。現在、染色のいろいろな場面で人造染料が使われているが、その人造染料のもととなる石炭は、植物が長い歴史を重ねた結果できたものである。そのようなことを考えると、天然染料と人造染料の繋がりを感じる。また、人造染料の始まりは、1856年ウィリアム・パーキンがマラリアに効く薬の合成実験途中で偶然あらわれた紫色の発見からであったこと、古くは色のもつ威力や薬の効果をそのまま得ようと、顔料や薬草による染色行為が身体、衣服に行われたこと、ここ佐賀で鍋島更紗を創始した九山道清は、薬学を究めた帰化の人であったこと等、染色は薬とも少なからず不思議な縁で結ばれてもいる。天然染料の藍を用いたこの工程は、これらのような様々なことを思い起こさせる。

ここは「藍染め」の醍醐味で、黄緑色から青色への被染布の変化は、だれもが興味、感動を示すところである。この気分は、造形への興味に繋がる大切な感覚であると思われる。「藍染め」設定理由の一つがここにある。また、藍という植物が染料として成り立つことに大きくかかわっている酸化、還元のこと、染色の意味を理解することで化学領域への興味へと繋がる期待ももてる。

1 染色

- ① 糊板からはがした布を静かに藍液に沈める。1分ほど浸したら藍液から引き上げ、新聞紙の上に乗せる。初めは藍液の黄緑色であるが、酸化現象により次第に青く変わる。これは藍液の染着のしかたで、還元状態で染料となる藍は、それが酸化されることによって、もとの水に不溶のインジゴとなり、その青色を呈す。



- ② 十分に青く変化したら再度1分ほど沈め、新聞の上に引き上げる。これは、藍による染色は回数が増すほど濃い色になるためである。時間の都合で2回染めとしたが、染めの回数を増やせば濃く深い色が求められる。



4) 仕上げの工程

1 水洗・ソーピング

- ① 糊は水に浸すことによって緩くなり取れ始める。布の表面に付いている糊が取れるまで、水を換えながらしっかりと水洗する。この時、青く染まった形が見えてくる。染色工程の中にはいくつかの感動の場面があるが、水洗工程の時に糊が落ち、形が出現する時は、その最たるものであるかも知れない。その後、洗剤の入ったお湯で余分な藍を落とす。



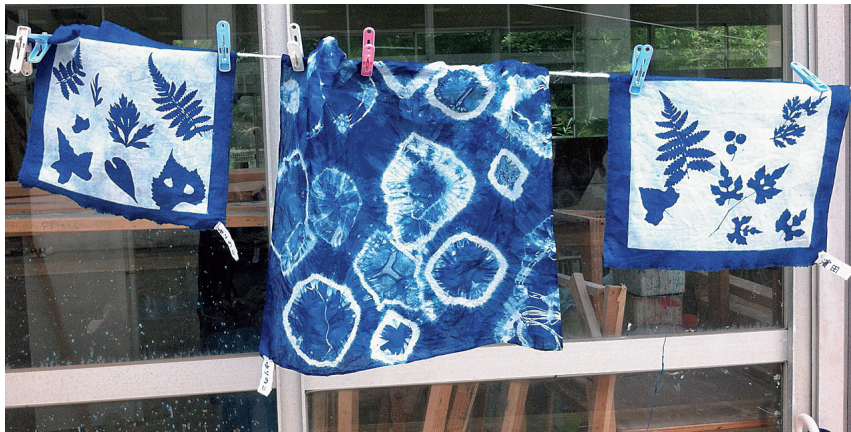
②乾燥



教員免許更新講習における教員の作品。糊の付いていた面は白く布本来の色が残っているのに対し、裏は青く染まっているのは、糊防染による浸染の特徴である。

3. 小学生の藍染め体験を通しての考察

教員免許更新講習で行った「藍染め」を小学生に体験させた。制作は連続した2日間で行い、制作時間は1日目が1時間、2日目が3時間であった。1日目に葉の採取から糊置き、糊の薄い部分の修正までを行い、ドライヤーでの乾燥は2日目の朝に行った。制作時間が十分にあったため、絞り染めのハンカチも制作し、葉を用いた型染めと同時に染めることとした。染色工程については、前述の教員免許更新講習と同様である。また、ここでは藍による絞り染めについては論旨とへだたるため、絞りがつくる偶然性から生まれた形から、子供たちがいろいろな形を想像することにつながり、次の造形思考のステップが期待できると感じた述べるにとどめる。



小学生による葉を用いた藍の型染めと絞り染めの作品。構成や糊置きがあまり困難でないように布の大きさを25cm × 25cm 程度と小さめに設定した。

子供たちは自ら様々な形の葉を選び、中には虫食い跡のあるおもしろい葉を見つけることができた子もいた。小学生は「葉の形」により注目し画面を作っている。そして、自分の選んだ葉をあれもこれも見せたいという思いが伝わってくるかのように、画面の中で全ての葉が主役となるよう平等に並べられている構成からもそれが見て取れる。また、今回行った「藍染め」は強くものの形が現れるので、自然がつくる形の美しさに気づいていた。自然がつくり出す美しいフォルムに気づくこと、それが画面にちりばめられて一つの作品になっていくこと、もっと言えば、自分の見つけた形で画面が作れることの喜びを、十分に味わうことができた。さらに、布や染料という表現材料との出会いも見逃すことのできない点である。

教員は与えられた画面の中での「葉の構成」に意識が向いているのに対し、小学生は「葉の形」に意識が向かっている。小学生と教員の作品を比較すると、構成と葉の形への意識の差は明確である。画面を構成することを学習すると、全体のバランスを考えて作品を制作するようになっていく。すると、今回のような葉は画面の中での一構成要素として捉えられがちになり、葉の形自体の美しさよりも、図と地の割合、画面の中の動きや表現といったことが、造形思考の中心となる。「藍染め」体験で見てきたように、専ら葉の形に注目して画面を作って行く小学生の時期に、生の葉を用いたデザイン方法論による「藍染め」体験を行うことは、自然の生み出す形の豊かさを改めて感じることでできる教材として極めて有効である。また、いろいろな教科とも繋がり、教科間での展開も望めることとなる。

4. おわりに

鳥谷さやかの、生の葉を用いて型紙とするというアイデアの提案を受け、教員免許更新講習における染色工芸演習での下絵制作の柱とし、実践を行った。一般に型染めと呼ばれる染色方法では、4つの工程を必要とする。下絵を作る、型紙を作る、糊を入れる、染色をする、の4つである。先の、生の葉を用いて型紙にするということは、この4つの工程の2つ分にあたるものである。この方法論を用いることは、工程の短縮はもとより、従来の描いて下絵を作る造形思考とは異なる何かが生まれそうな期待が持て、他の効果もいろいろ求められる可能性がある。そこで、染色的で親しみ深い言葉の響きを持つ染色技法、「藍染め」と合わせた課題設定を行うこととなった。ここで、様々な染色技法がある中、「藍染め」と呼ばれる染色技法を選択した理由としては、限られた時間の中で比較的濃い色が求められること、染着の様子が分かりやすいこと等が上げられる。また、一端ではあるが、染料や被染布である木綿などの材料から見える歴史的な事、染着の意味を知るための化学的根拠などを考えることにより、他分野との関わりが深いことを理解し、他教材の繋がりを通じて、教科間の展開が望めると考えたからである。さらに実践の中から、生の葉を用いたデザイン方法論は、今回の「藍染め」の展開の重要な部分を成したことは勿論、有効な造形教育の要因となる確証も得た。

最後に、今まで述べてきたように、染色工芸学習にはいくつかの手順を踏まなくてはならない。しかし、糊を落としてようやく水中に現れる形と出会った時の感動など、その折々に気持ちを揺らすものがある。この工程で感じるような感動こそ、造形教育において何よりも大切なものである。そして、染色工芸だからこそ受けることができる感動が生まれるのである。

参考文献

- 1 青柳太郎著「工芸のための染料の科学」 理工学社 1994年
- 2 木村光雄、清水慶昭 著「染色用語の基礎事典」 関西衣生活研究会 2003年
- 3 京都造形芸術大学編「染を学ぶ」 (株) 角川書店 1998年